



第 63 号

月 | 回 発 行

ひの心を継ぐ会

〒799-1336

住所:愛媛県西条市

上市甲 720-1

TEL:080-2986-0856

綱 領

- 私達は明德を明らかにします
- 私達は国家の鎮護となります
- 私達は大和世界を建設します

古事記

天地の初発のとき

— 西洋哲学 — (八)

反省的方法 —

竹葉 秀雄

論理は一方に於て認識の客観的意味を形成する法則の統一である。併し他方から云えばカントの先験論的方法に於てそれは主観の現実に従う統合の法則である。如何にして此主観法則が同時に客観の法則たり得るかというに、カントは其主観の超個人的普遍性即ち規範性を以て客観の超主観的対立性の根拠とした。所謂意識一般というのは斯かる普遍的な主観の謂に他ならない。併し先験論的方法は科学的認識の事実上の存立を前提として其権利上の根拠を問うことに特色を有するものであるから、現実の意識が如何にして其先験論的の法則を実現し得るかよりは寧ろ、其実現の方法如何に拘らず認識の論理的根拠として要求せらるゝ先験的統合の法則の何たるかに主たる着眼点を置くと云つてよい。即先験論主義が其方法の帰結である。カント自身は周到なる反省に由つて斯かる論理主義的方面のみならず、先験心理学に属すといふべき意識の構造にも(殊に「純粹理性批判」の第一版に於て)重要な説明を与えた。併し先験論的方法は論理主義を其帰結とし、論理の普遍的法則を明らかにすることを主たる目的とする。新カント主義がコーヘンのマールブルク派に於てのみならず、西南独逸学派のリツカート

(Rickert)に於て論理主義に徹底せられた所以である。併し斯く論理主義に純化せられることにより、事実の根拠を意味に求め、論理上事実より前に意味を置く、という先験哲学の精神を純粹に保つことが出来ると共に、其代償として、論理が現実意識から遊離し、意味が事実との連繋を失う危険を蔵する。所謂當為の哲学、形式主義的理想主義哲学が、其空虚不毛の故を以て今日人々の不信不満足を買うに至つたのも、此非事象主義の結果であるといわねばならない。(此傾向は、儒教にも仏教にもあつて、唯論理的に完全を期しても、眞実が伴わず、官学的なる朱子学から陽明学が生じ、規範化された比叡山から幾多の新仏教が生じた。)これに代つて同じく認識批判的方法の立場に立ちつつ事象性 Sachlichkeit の方向を採るものがフッセールの現象学である。果して現象学的方法は先験論的方法の欠点を免れて其具体性の要求を満たすことが出来るであらうか。

農士道

第六章 日本農道の本義

第一節 日本精神の真髄

三、「ひ」の本と「ひ」の末

菅原 兵治

奉仕の対象

然らば我々日本人はこの奉仕参贊の対象を何に求むべきか。日本国家に於ては申すまでもなく、我等「ひの本」国民の没我奉仕すべき対象は日本天皇にまします。此事に就いて亦深く考えて見たいことがある。それは何か、畏れおおき事ではあるが、日本天皇の御名に多く「仁」の字を用いさせ給うことである。仁とは生命の根源を謂う。漢法医学の用語によれば果実の最も中なる胚子を「仁」と呼ぶ。(杏仁は解熱剤として用いられる) 外側には美しい果皮があり、其の中には甘き果肉があり、其の中に堅き核があり、而して最も中心の所に胚子(即ち「仁」)がある。この果実が一度地中に入って発芽する時の状態を見るに、外側の皮も肉も皆其の身を殺して、中なる生命力の根元たる「仁」の育成に参贊奉仕する。換言すれば杏の種子の発芽に於て吾々はいみじくも「身を殺して以て仁を成す」のはたらきを見る。仁とはかくの如く、生命の根原(本)であり、一切の枝葉的存在のものが、其の身を殺し奉仕参贊する感激の対象である。かくて我等日本国民が、生命の根原として身を殺して奉仕する対象は実に大君であり、随つてその大君の御名を何仁親王と申し上げることは、「ひの本」の国として実に有難くも嬉しきことの極みではないか。吾等日本国民は、実にこの至上の感激を以て、この日本国家の「仁」にまします大君に奉仕して、身を殺して以て仁を成す「ひの本」の民なのである。

櫻花

日本精神とは何ぞや。分析と理論とに走る非日本的事ことあげを止めよ。日本精神の日本精神的宣揚の先覚の大人、本居宣長翁が快くも明確率直に喝破せる其の大音声を敬聴せよ。曰く、

敷島の大和心を人間はゞ

朝日に匂ふ山櫻花

と。あゝ、如何に透徹せる日本精神の大定義なるぞ。

今こそ日本国民は没我奉仕の「ひの本」精神に目覚め、温故知新の活眼を開いて此の霊音を味識せよ。山櫻の樹を日本国家に譬ふれば、一輪々々の花びらは、吾等一人々々の日本国民である。山櫻の根幹は実に我が日本天皇——国家の仁にまします。朝日に匂ふ山櫻花は、一輪々々の花が根幹の生命力によつて、各々其の分に応じてその生命の美を發揮するが、又散るべき時到来れば些かの未練もなく潔く散つて其の根に帰する。殊に其の散り際の潔きを以て、山櫻花の山櫻花たる本性とする。而して是れ実に山櫻花の「ひの本」するはたらきであつて、吾等日の本民族は、国の本にまします大君の御為には、其の一輪々々の花びらに当る吾等一人々々のすべてを潔く捧げ尽す義勇奉公の念の熾烈なること、亦当にかくの如くあるべきである。大伴家持の作たる

海行かばみづく屍、山行かば草むす屍、大君の、辺にこそ死なぬ、かへりみはせじの歌も、実に此の日本国民の大君に対し奉つて「ひの本」する——没我奉仕する——義勇奉公する——身を殺して仁を成す尊王の尽忠を歌いしものであつて、本居翁の「敷島の大和心を人間はゞ、朝日に匂ふ山櫻花」の歌を、更に端的に実行的な感激を以て高唱せしものに外ならないであらう。

ローマとギリシア

三浦夏南

最近ローマとギリシアの歴史について学んでいると、今更ながら、西洋と日本の風土、文化の違いに驚かされる。アテネの政体が王政から始まり、貴族性に移行し、終には民主制へと墮落していく過程には、近代以後の社会と同じように、商工業の隆盛と土着貴族の没落交代がある。これが紀元前のことだと知ると、西洋人にとって、現代起きている事象は理解不能な珍奇なものではなく、遙か昔から繰り返されてきた歴史の必然であることが分かる。逆に日本人にとって、この現象は理解しがたい。何故なれば、江戸時代まで農本社会が当然であった日本人にとって、商工業が農を上回り、金融資本が土地に根差した富の力を上回るということは、時代によってごく一部分には見られたとしても、日本人全体に感ぜられるまでには、至らなかつたからである。本当の意味で、西洋と同じ危機を感じる事が出来るようになったのは、戦後経済成長以後かもしれない。ここに日本人が自国の商本化の危険を切実に思うことが出来ない大きな原因があるのではないかと思う。

スパルタの人口比率にも驚かされる。軍事の大権を一手に握る武装した貴族たちをひとすると、次に位置する商工業者が七、最後に奴隷の如く扱われ、参政権を持たない農民は十六である。紀元前においてすでに農民の半分が貴族及び商人であり、農民の収穫物の半分は税金として吸い上げられていたという。しかも、この貴族たちは、農的生活の中から内発的に自然発生してきた本家長老的家柄や、そこから生まれた武門武士の家系などではない、かつてスパルタを外部から侵略したドーリア民族というギリシアから言えば異民族の民なのである。そして、何を隠そう農奴の如く扱われる哀れな民たちこそ、かつての先住民、真のスパルタの民なのである。その間で利を貪る商人たちは、ドーリア人の侵略に乗じて移住してきた外国人であるという。このような状態で、国に正しい道が行われる訳がないことが一目瞭然、歴史を見なくても分かるというものである。彼らが誇るところの軍事力というものも、畢竟、内には常に反乱する可能性のある農奴を抑制するためのものであり、一方では内部の矛盾葛藤を外部へと発散させて行く覇武でしかない。その非人道的な軍人育成を見ても、容易に推測できることである。貴族の生ま

れであっても、戦闘能力のないものは殺されるか奴隷に落とされてしまう。親元にいられるのは六歳まで、七歳になれば寄宿生活を強制され、戦闘者としての訓練に専念する。これでは家族の愛を知らず、自然に育まれた性情を持たない恐るべき戦闘狂を生み出すだけである。我が国の人情の機微を知り、自然の玄妙を歌に詠む情緒豊かな武士とは似て非なるものである。

我が国の人口比率は、幕末文明爛熟の時と言われた時代でも九割近くが農民であり、栄えたと言われた武士も全体の中では一割にも満たない存在である。しかもその武士の中には半分農民のような生活をしてきた貧しい武士も多々あったことを考えると、ほとんどの国民が農的社会的住人であったのだ。それに対して、現代の人口比率を見ると、第三次産業が六割を超え、逆に第一次産業が一割になつてしまっている。耕さず物売るものが半分以上を占め、耕し生産するものが一割になつている社会が果たして健全であるかどうか、ローマ、ギリシアを見て考えるべきではないだろうか。あの専制的奴隷国家であったスパルタでも、貴族と商人の倍の人数農民がいたことを思うが良い。一次産業の六倍の商人が溢れかえる我が国がどこに向かうべきかは言わずして分かる明白のことであろう。

小野鶴山の『大学師説』⑤

庄宏樹

次に「至善に止まる」についてだが、これは「明明徳」と「新民」とが、一体どのようにあるべきなのか、ということ説いたものとされる。言い換えれば、「明明徳」「新民」以外の第三の実践項目として「止於至善」が挙げられているのではない、ということである。鶴山は次のように述べている。

己が徳を明にするは、ちとばかり明にするも明は明なれども、それでは本法の明でない。人を治るに、領内のしづかなと云様なことでも新は新なれども、本法の新でない。これでこそもう此上はない、これが本法至極天然自然のなりじやと云までつまりたが至善ぞ。其至善に尻打据へるを止と云。一旦至善でも、其なりがまたかはる様なことでは役に立たぬ。

文中にある「本法」とは、現代つかわれる言葉でいえば「本物」といった意味合いになる。これは例えば、目の前にある紙に、コンパスで書かれた円と、フリーハンドで書かれた円の二種類が書かれているとすると、コンパスを使って書いた円の方が、より美しく完成されているという意味で「本物」に近いと言えようが、そのような「完成形」「理想像」といったニュアンスが、この「本法」という言葉には含まれていない。

ここでの鶴山の講義と同じような意味のことを、山崎闇斎が編纂した『大学啓発集』に収められている、次のような朱子の言葉にも見て取ることができる。

至善雖不外乎明德、然明德亦有略略明者、須是止那極至處。

至善は明德に外ならずと雖も、然れども明德も亦た略略に明なる者有り。須く是れ那の極至の處に止まるべし。(『朱子語類』巻十四)

つまり、「至善」といっても、明德のほかに何か別の善があるわけではないが、同じ明德でも、完成されたものとしていないものがあるため、「極至の處」にまで到達した明德のことを特に「至善」と呼んでいるのだ、というわけである。では、明德

の「極至の處」とは、一体どのような境地なのであろうか。鶴山は言う。

孟子なども、堯舜をあて、証文になさるゝが、明德新民も堯舜が本法ぞ。堯舜も人、われも人じやからは、堯舜のなりでなふては本法でない。あれが本の人と云もの、またあれにならぬは本の生れついたなりにかへらぬと云もの。

この文章を一読すればわかるように、鶴山は明德の極至、すなわち至善の体現者として堯舜のことを捉えており、また堯舜のような境地に到らなければ、それはまだ本物の「明明徳」とは言えない、と考えていたのである。

ここで鶴山は、孟子が堯舜のことを「証文」としていた、と語っているが、確かに『孟子』という書物の中には、堯舜について話題にした箇所がいくつも登場する。例えば、滕文公章句上の冒頭部分には、「孟子 性善を道い、言うに必ず堯舜を稱す」(孟子道性善、言必稱堯舜)とある。これは、孟子が滕という国の文公に対して、常に堯舜のことを引き合いに出しながら、性善の考えを説いたということである。

堯舜は言うまでもなく古の聖人であるが、彼らも我々と同じ人間であるからには、我々も堯舜と同じような境地に到達することができるし、できる以上は、それに向かつて怠らず努力しなければならない。こうした考えは、北宋の時代になって、朱子の先駆たる道学者たちによって特に強調されたところである。彼ら北宋の道学者たちのスローガンは「聖人学んで到るべし」という、いわゆる「聖人可学」論であった。「到るべし」とは本来「到ることができる」という意味であるが、同時にそこには「到らなければならない」という思いも込められている。

鶴山にとっても、聖人は目指すべき目標であった。鶴山は「堯舜も人、われも人じや」と言う。すなわち、どのような時代に生まれようと、人として生まれた以上は、誰しもが堯舜のような至善の境地に到達可能なのであり、またそれを目標にして「明明徳」と「新民」とに日々努めること、これこそが「大学の道」を実践するということなのである。

とよくも農園だより

梅雨に入り、雨や天気の悪い日が続く中、その合間をぬって今月もたくさんの農作業に取り組みました。

様々な品種を育てていた麦は、それぞれの刈り取り時期を見極めながら丁寧に刈り取っていきました。家族全員で、田んぼの学校や、近くで手植えをされている農家さんのお手伝いに参加し、手での無農薬栽培にも挑戦しています。

アワ、キビ、ヒエなどの雑穀を播いたり、藍、綿の苗を植えたり、少しずつ獲れ始めている夏野菜のお手入れをしたりもしました。立派なズッキーニやキュウリは、毎日炒め物や漬物、サラダとして食卓を彩ってくれます。トマトやナス、シソやゴボウ、オクラと里芋もぐんぐんと伸び、お寺さんに様子を見に行く毎日を楽しませてくれます。

雨の日には季節の仕事をしました。地元の方や親せきからたくさん頂いた梅で梅サワーに梅干し、梅肉エキスを仕込みました。またヨモギやドクダミ、ビワの葉を焼酎に漬けて虫よけスプレーや湿疹に効く薬として仕込み、医療も少しずつ自給ができるようになっていきます。

食事も、より自給自足ができるように白米から雑穀入り発芽玄米ご飯に切り替えました。これによって、おかずも変化し、漬物やみそ汁などの素朴なものの少量のみで満足するように、家族も以前に増して健康になりました。お水も水道水から西条市の「う

三浦美恵

ちぬき水」を汲むようになり、質素ながらも満足のいく食事ができるようになりました。

自治集団の活動の一環として、愛媛県での教育部の開催や、その後の農園見学、むすびの里にいる農士候補生の研修も行いました。同じ志をもつ仲間同士で語らい、農作業に勤しむ時間は楽しく、あっという間に時が過ぎりました。

雨で農作業が難しい日は、体を鍛えるために肥田式強健術に取り組みました。肥田春充先生という、丹田を鍛え、心身が鍛えられている超人の勧める身体操作に家族で取り組んでいます。その後主人と長男は、肥田先生の教えに従って水風呂に入り、乾布摩擦をして一日のスタートを切ります。朝のルーティーンとしてそれを行うことで長男も自信がついているようです。雨の日でも、

三浦家からは、強健術に取り組む元気な掛け声が聞こえてきます。

また、洗剤も自給できるよう、市販の合成洗剤の見直しをしているところです。あらゆる面から健康を害するものを排除し、一方で家族全員が元気で自治をすることができるよう、自分にできることを精一杯していきたいと思えます。



★今後の予定

ひの心を継ぐ会 定期総会：令和五年七月十六日(日) 十一時～十三時

愛媛県護國神社 神楽殿

(松山市御幸一丁目四七六)

★一燈照偶 万燈照国

ひの心を継ぐ会は竹葉秀雄・近藤美佐子両先生の精神を継承し、発展させることを目的として生まれた会です。一人の「ひ」の精神が周囲の人々の心に「ひ」を燈し、やがてそれが国を照らす「ひ」になることを願い、活動を行っております。皆様には何卒ご理解とご支援を賜りますようお願い申し上げます。

★年会費

一般会員	三千円
賛助会員	一万円
特別賛助会員	三万円
支援会員	一万円

★振込口座

愛媛銀行 普通預金 本町支店

口座番号 六一四二七三五

『ひの心を継ぐ会』